1996.3.3 京都連盟 H8 トレーニングチーム第1回学習会

自然観察とは

1．なぜ自然を観察するのか

● 観察とは

＊ 「月の模様」── 月のウサギが逆立ちするはずがない。
＊ 「六色の虹」── 虹は七色に決まっている
＊＊同じ自然があっても，それを見る人の心のありようによっては，同じには見えない。
＊＊人間は自分が今まで見てきた見方 ── 生きてきた生き方 ── でしか外界を見ることができないのではないか？
＊＊＊文化のフィルターをとおして見ている
＊＊＊＊個々に違ったフィルターをとおして自然を見ている人間がいる，ということを前提として押えたうえで，なお，ある見方で自然を見ていこうとするのが「自然観察」

● 自然観察の段階

観察ということ ➡ 相手をありのままに見るというところから出発
（固定概念を捨てる）
⬇
事実を大切にする

見ようと思って見る ➡ じっと見る ➡ 見えなかったものが見えてくる
この経験が ⬇
「わかる」⇒「発見」 ⇒ 心のよろこび，発見のよろこび

★ 発見のよろこびを知る ⇒ 自然観察の目的の第一段階 ⇒ 心から自然観察の好きな個人に創り変える ➡ 自然を守る第一歩

- 精神的支えとしての自然の価値
- 自然の生態学的価値

} 自然観察をとおして体得していく２つの目標

⇩

自然観察とは，自然の事物についての知識を学ぶ作業ではない

自然観察という作業をとおして，人の精神が変革されていく
＊すべての人が，より豊かに地球を見ることができるように彼らの心を変えていく。

★ 人と自然のかかわりのなかで矛盾を見抜く ⇒ 自然観察の目的の第二段階

★ 自らを変えていく ⇒ 自然観察の目的の第三段階

自然とのつながりを見る目を養い，人間の生活を守る基礎づくりをするものでなければならない。自然観察が個々の趣味を越えて，自然を大切にする ── 本当の意味で人間を大切にする力となるためには，一人一人が自らの生き方を変え，考え方を変えながら，自然を見る作業を重ねていく。

2．自然観察の具体化

● どんな自然を観察するのか

★ まず自宅のまわりで ──

「都会人の自然保護」

＊ビルの空を渡る鳥の群れ，
＊歩道の片隅に咲く野草，
＊空ゆく雲の移り変わり，

} これらに心をとめようとする人は少ない
⬇
自然と人間のつながりというものがだんだん見えない人間になっていってしまう
⬇
本能的な自然への飢えを満たすために自然の中へ出かける

★ 土地の自然を自分の心のなかに発見していく

自然観察とは
- 知識を試す作業ではない
- 自分の住んでいる土地の自然を自分の心のなかに発見していく作業

日々見続ける ⟷ 自分の気に入った散歩道を決める（500m～2Km）
⇩
⇒ 身近な自然　地域の自然を見る目を養っていく
⇩

季節による変化
一日のなかでの変化
天候による変化
人為的な変化

} ← 見続けることで，はじめて変化が見えてくる

都会での作業
（自分のフィールドを設定）
- 都会にも神社はある
- ビルの屋上から地域の風景が見渡せる
- 汚れた川もある　水鳥の集まる川や池もある
- 公園もある
- 街路樹の並木もある

★ 対象となる３つの自然
- 自分の住む地域の自然（自分のホームグランド）
- 自分の住む地域の自然と対比的な異質の自然
- 多様なその他の自然

● どういう見かたをするか

① 道具を使わず感覚を生かして見る

＊ただの散歩で見えるものを見ていく ⟹ 肉眼で見える自然が一番大切な自然の姿

見える
聞こえる
におう
} ３つの感覚を訓練し，道具を使わないで見る

② まとまりのある見かたをする

まず全景を眺める習慣をつける
- 地形的な特徴（地学的自然）
- 植生的な特徴（生物的自然）
- 人間の生活が与えている影響（人文的自然）

③ 描いてよく見る

描くことによって見えてくるものがある――スケッチそのものが大事にならないよう

④ 話し合ってわかっていく

- 描いてみる
- 近づいてさわってみる
- 観察しながら気づいたことを話し合う

} → 自然観察の３段階

⑤ 疑問形で見る

なぜなぜそうなっているのか？　なぜそこにあるのか？　あの鳴声は何のサインだろう？　この足跡はだれが何をした跡だろう？　あの鳥はどんな飛び方をするだろう？

⑥ 普通の生物を大事にする ―― 珍しいものの名にこだわらない

＊ 自然観察の目的は生物の名前を覚えることではない

⑦ 採らないで見る

「子供が殺す気がおこらないほど，生きているのもに関心を持つようにしたい……。
採集だけでは博物館はできても，自然愛好者はできない」

⑧ 時間の軸で見る

⑨ 自然のしくみと，人と自然のありかたを見る ← 自然観察の目的

● どんな人間をつくりたいか

① 書物をとおしてではなく，自然の事物からものを語る人間をつくりたい

２つの指導例
- A．まず花の絵を見せて花について勉強し，「それでは外に出かけてこれにもっとも近いものを見つけましょう」
- B．先ず野原に出かけて，何か花を見つけ，「それではどんな花かみんなでよく見てみよう」

古い方法と　と　よりすぐれた方法　（ベイリ）

アガシーの有名な言葉　“Study nature, not books”

＊ 自然観察は自然をありのままに眺めた人間が，そのことのなかから自分の思想を語れる様にしていくもの。

② ささやかな自然であっても，その自然の存在と共感しあえる人間をつくりたい

自然と親しみ自然を知る努力を続ける
⬇ だんだん気づくようになる
自然が自分と共感しあう，自分の精神生活のうえでなくてはならない存在

③ 自然の中で何が美しく何が醜いかという，価値基準をはっきりもった人間をつくりたい

④ 自分の自然をもつ人間をつくりたい

「日本人はどうして，人の行くところに行こうとするのだろう。われわれイギリス人は人のいないところを選ぶのに」　イギリスの教科書

⑤ 自分が自然から得たものを他の人に伝え，自然を大切にしたい気持ちを広げていく人間をつくりたい

（ボーイスカウト京都連盟・平成８年　ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾁｰﾑ 第１回学習会資料　3.3.1996 ）